

<映画評 自作を語る>

## 映画『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』 に入れられなかったこと

太田直子（フリー映像ディレクター）

2009年10月某日、映像制作会社グループ現代のベテランディレクターに撮影をひきついでほしいと依頼され、私は初めて、通信制中学校、東京都千代田区立神田一橋中学校通信教育課程の面接授業に足を踏み入れた。普通課程の生徒たちが休みの日曜日、がらんとした校舎に、1年生6人、2年生5人、3年生3人、それぞれに先生が一人ずつ、3教室を使って贅沢に授業が行われていた。

平均年齢73歳の生徒たちが、自分の子や孫のような年代の先生の話、前かがみになって聞いている。時々、「せんせ〜」という甘えたような声が飛んだり、若い先生をからかって困らせてみたり。年配の女生徒たちは、まるで10代の少女のようにはしゃいでいた。

学校に来ると青春時代に戻る。その不思議な雰囲気魅かれて、以後2014年4月まで足かけ5年、小型のビデオカメラを抱えて月2回ほどの面接授業に足を運び、また生徒さん一人一人のご自宅にお邪魔して、学校にたどりつくまでのお話をうかがってきた。この記録をまとめたものが、3月に公開した映画『まなぶ 通信制中学 60年の空白を越えて』（グループ現代 92分）である。

映画の中には、5年間のうちに出会った、戦争で父親を失ったために働かざるを得なかった人、障碍ゆえに引きこもり60歳を過ぎるまで家族に守られていた人、貧困ゆえに奉公に出された人など、6人の話を収録している。いずれも、誰もがどこかですれ違っていたかもしれない、ごく普通の人たちである。しかしながら一人一人、それぞれのドラマと学びに対する強い思いを持っている。映画を観る人たちは、身近な誰かと重ねて、あるいは想像して観てくれるのではないか。そう思

いながら編集した。

10代の頃、学校に行けなかった、義務教育を受けられなかったことが、その後の人生にどんな影響を与えたのか。またその欠落を埋める学びが、人をどう変えてゆくのかということ、私自身が生徒のみなさんから学び、そのことを素直につないだつもりである。自分があたりまえのように受けてきた義務教育の大切さを、それを欠いた人たちの姿から改めて知ることとなった。通信制中学に関しては、私自身、存在すらも知らなかった。

映画を制作するにあたり、たくさんの人たちから話をきき、カメラにおさめましたが、「学ぶことの意味」にテーマを絞り、多くをそぎ落さざるを得なかった。

今回、「自作を語る」というテーマで原稿依頼をいただいた時、まず頭に浮かんだのが、表に出す機会の少ない、映画の中に入れられなかったことであった。ここでは二つを紹介したい。一つは通信教育課程の教育の充実に尽力した先生たちのことである。

### 通信教育課程を支えた教師

中学校の通信教育課程は、夜間中学と違い、昭和23年の開始から学校教育法第105条に規定され、6・3制の義務教育未修了者への救済策として、全国80を越える中学校、高校に併設された。

千代田区立神田一橋中学(当時は一橋中学)は昭和23年7月から国語の添削指導を始め、翌年には数学、理科、職業(昭和47年に終了)といった具合に履修できる教科が徐々に増えている。昭和28年には面接授業も始まり、29年には社会科と英語も加わった。

しかし、時代の波とともに通信教育課程を

設置する学校は減り続け、昭和 26 年には 66 校、32 年には 19 校。43 年以降は大阪市立天王寺中学校と一橋中の二校のみとなっている。昭和 40 年代初頭には、東京都から生徒募集停止の方針が出されたが、一橋中学では、「通信教育の灯を消すな」を合言葉に教師と生徒が反対運動を展開、方針を撤回させた。通信教育課程の意義を、教師たちも嘔みしめ、生徒とともに学びの場を守ったのである。

そしてさらに、一人の戦中派教師の奮闘により一橋中学通信教育課程の教育内容は充実していく。昭和 51 年、専任教諭となった馬渡範子氏が、義務教育を受ける生徒の権利として、すべての教科と特別活動を履修できるようにするべきだと主張。行政に働きかけた結果、昭和 55 年、それまで五教科だった通信教育課程の授業内容に、美術、体育、技術家庭の実技教科のほか、生徒会やクラブなどが加わることになったのである。

これによって昭和 56 年 3 月、一橋中学通信教育課程初めての卒業証書が発行された。前年までは修了証書しか出せなかったのである。その影響と、創設 30 周年がマスコミに大きく報じられたこともあり、昭和 54 年の新入生は過去最多の 171 名、55 年の新入生は 103 名だった。生徒の年齢も働き盛りの 4、50 代が中心であり、その後、高校、大学へと進学した人たちも少なくなかったようである。

馬渡氏は新制中学一期生。権利と平等、平和と民主主義を戦後、多感な時期に学んだ世代である。「学制改革で積み残したと思われた層が、現実には、四十年を経た今、二十一世紀に向かうにふさわしい、たくましい学び方をしている」と「生きる限り学び続ける」生徒たちの姿勢を評し、「日本の義務教育史にとって一つの救い」、「また、それを支えた官民関係者の誇り」でもあろうと、通信制教育課程のことを創設四十周年記念誌に書いている。

一橋中学を離れても、毎年のように通信教育課程の卒業式に参列され、通信教育にかける思いは一方ならぬものがある。そして、実は彼女の他にも、多くの元教師たちが卒業式に足を運んでいた。自身が教えたこともない卒業生たちの答辞に涙し、その頑張りを讃え

るのが、私が通っていた間、通信教育課程の卒業式の常であった。それだけここでの経験が、教師にとっても教員人生の中に深く刻まれた珠玉の時間であったのであろう。

### ある同窓生の話

もう一つ、卒業式に参列する同窓生のことを紹介したい。通信教育課程の卒業式には、毎年、何年前に卒業したかわからないような先輩たちもやってきて、初対面の卒業生を送っていた。式の間がいてみれば同窓会の様相で、懐かしい先生やクラスメイトに年に一度、会いたくて来るのであった。

何人かの同窓生に話をきいた。印象に残っているのは、もう 80 代半ばになる元クラスメイトの男女の「もう今年が最後だと思ってきました」と、腰をかがめながらいう姿である。二人は、特別な用事がない限り、毎回卒業式に参加してきたという。「この学校にきて、人前で堂々と話ができるようになったからね」と、その後、高校まで進学したという男性はいった。長じて母校を持ち、ようやく救われた人たちの、学校への思いに心が熱くなった。

ある男性はハイヤーの運転手をしている時、偶然きいていたラジオで通信教育課程のことを知ったそうである。自分なんか学校に行けるのだろうか。迷った挙句に学校に連絡を入れ、初めて足を運んだその日。彼は校門の前で足がすくみ、行っては戻りを 3 回繰り返した。そして最後は、目をつぶって校門をくぐったというのである。

「なんだ、どうってことないじゃないかと思っただね」。男性はそう言って笑ったのだが、私はその話を聞いて打ちのめされた気がした。

60 歳を過ぎ社会人として十分な経験をつんだ男性と、学校との距離…。私は義務教育を受けられないまま生きてきた人たちの気持ちを、どこまで理解していたのだろうか。いや、わからなかったのだ。同時に、学びたいという思いを持ちながら、いまだに学校に辿り着けずにいる人たちの存在を思った。

映画が、そうした人たちの背中を押すことつながれば、と切に願う。